

2018/2/17

## 第9回 み言葉と sacrament

### 1. 聖公会の礼拝におけるみ言葉と sacrament (聖餐) のバランス

聖公会の祈祷書を見ると、朝夕の礼拝（および朝夕の祈り）や昼の祈りなど、聖書のみ言葉（およびその解き明かしである説教）を中心とした礼拝と、入信の式（洗礼式）や聖餐式（ユーカリスト）などの sacrament (聖餐) を中心とした礼拝とが含まれています。また、聖餐式も「み言葉の礼拝」と「聖餐」とが組み合わされているのが分かります。リタージカル（典礼的）な礼拝の中でこの二つの要素がバランス良く組み合わさって、聖公会の礼拝は神さまへの良い献げ物になっています。このようなバランスは、他の教派の礼拝には少ない特徴であると言えるでしょう。

現行の祈祷書の聖餐式の構成を見てみましょう。

＜参入＞唱和、キリエ (or 栄光の歌 or 三聖唱)、大栄光の歌、特祷

＜み言葉＞旧約聖書／詩編／使徒書／福音書／説教／ニケヤ信経／代祷／懺悔

＜聖餐＞平和の挨拶／奉献／

感謝聖別

心を神に／特別叙唱／聖なるかな

聖別祷＜エピクレーシス(聖霊降下の祈り)、制定語＞

記念唱／記念の祈り（アナムネーシス）

交わりのエピクレーシス(聖霊降下の祈り)

栄唱（ドクソロジー）

陪餐

主の祈り／パン裂き／（近づきの祈り）／（神の子羊唱）

分餐

陪餐後の感謝

祝福と派遣

ここから分かるように、大きく「参入」「み言葉の礼拝」と「聖餐」から成り立っています。参入では、その日の特祷が祈られ、礼拝のインテンション（意向・趣旨）が明らかにされます。その次に、旧約聖書、使徒書（主として書簡）、福音書が読まれます。神の言である聖書のみ言葉を聞き、その解き明かしである説教に耳を傾けて、み言葉そのものであるイエスさまご自身を受け入れる準備をします。そして、公会の信仰告白である「ニケヤ信経」（ニカイア＝コンスタンチノポリス信条）を唱えます。また、「代祷」では、世界の教会全体のため、そして人々のために祈ります。「懺悔」では、司祭と会衆とが相互に神に懺悔し、相互に執り成しの祈りをいたします。日本聖公会の懺悔の式文は、司祭と会衆とが相互に罪を告白し、相互に執り成しの祈りをするという点でユニークなものですが、これは中世の「モサラベ（モザラベ）典礼」の中から取り入れられたものです。

み言葉の礼拝の中心は、聖書朗読と詩編、説教です。近年日本聖公会で行われている「み言葉の礼拝」は、聖餐式のこの部分を独立させ、聖書日課の連続性を保ち、信徒が一貫したみ言葉に触れるために定められた式文です。

聖餐式聖書日課は、世界のローマ・カトリック教会や聖公会、ルーテル教会などが共通して用いて

いる「共通聖書日課」に基づいています。この聖書日課は三年周期（マタイ福音書を中心としたA年、マルコ福音書を中心としたB年、ルカ福音書を中心としたC年。ヨハネ福音書はB年や復活節などに配分されています）で選ばれています。それは教会暦と密接に関連しています。教会暦の一年間は降臨節（他教派では待降節というところが多いようです）第1主日から始まり、翌年の降臨節前主日で終わります。この間に降誕日から始まる降誕節、顕現日から始まる顕現節、復活日前の大斎節（聖週を含む）、復活節、聖霊降臨後の節（特禱と聖書日課については「特定XX」と名付けられています）が配置されています。福音書の場合は、キリストの秘儀を生涯の主要な出来事を追って選び進む「選択秘儀朗読」という方式をとっており、旧約と使徒書はある程度の「継続朗読」になっています。主要祝日などは、福音書と旧約聖書と使徒書は深い関連をもっていますが、その他の季節の場合は旧約聖書が「予型」、使徒書が「対型」となるように選択されています。（年間聖書日課は日々の朝夕の礼拝で用いるもので、二年周期になっています。）

み言葉の礼拝に続いて聖餐<sup>1</sup>が行われます（ローマ・カトリックの用語ではミサです）。聖餐の祈りの中で特に大切なのは、感謝聖別禱です。中でも「制定語（制定辞）」<sup>2</sup>は、新約聖書の中にイエス・キリストご自身の言葉として記録されているもので、「主イエスが自ら定めた」ということを明らかにする言葉です。中世の古い神学では、この制定語によってパンとぶどう酒がいわば魔術的にイエスさまの「肉と血」に実体変化すると教えられていましたが、今では、それが焦点であることには違いありませんが、聖餐式の礼拝全体を通じてイエス・キリストの臨在があり、パンとぶどう酒がイエスさまの「肉と血」を体現するものになると考えられています。イエス・キリストの言葉と行いによって、物体は神的なものを指し示す「しるし」となるのです。

## 2. サクラメントとしての洗礼

最近、日本聖公会では、「堅信前の陪餐」が可能になりました。つまり、洗礼をうけていれば、「キリストの体」である教会の完全なメンバーとして受け入れられ、陪餐できること、堅信式は教会の運営や宣教などの責任を自覚的に負うためのものであり、陪餐のアメの資格ではないことが確認されたわけです。言い換えれば、サクラメントとしての洗礼の意義が回復されたということになるでしょう。幼児洗礼を受けた青少年（あるいは成人）は、一定の学びを経て、堅信式前にパンとぶどう酒に与ることができるのです。

では、洗礼とは何でしょうか。水で体を清め、宗教的な意味でも罪や汚れを洗い流すというのは、

<sup>1</sup> 聖餐式は英語で「ホーリー・コムニオン(Holy Communion)」と言いますが、ローマ・カトリックでは一般に「ミサ」（これは本来、ミサ聖祭の最後に発せられる「派遣の言葉」に当たる「イテ・ミサ・エスト Ite missa est（行け、集会は終わった）」ということばから生まれた呼び方だと言われています。）と呼ばれています。また、東方正教会では「奉神礼」あるいは「聖体礼儀」「聖体機密」と言います。最近では、カトリック教会では「感謝の祭儀（エウカリスティア<sup>1</sup>）」と呼ばれており、聖公会を含む世界の教会でも「ユーカーリスト」と呼ばれることが増えています。他にも、「主の晩餐(The Lord's Supper)」「パン裂き」などと呼んでいる教派もあります。この豊かな呼び方の中に、すでに聖餐の内容の豊かさが表されていると言ってもよいでしょう。

<sup>2</sup> 「主イエスは、すすんで引き受けられた苦しみに身を渡されることになった時、パンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われました。『取って食べなさい。これはあなたがたのために与えるわたしのからだです。わたしを記念するため、このように行ないなさい』また食事ののち杯を取り、感謝して彼らに与えて言われました。『皆この杯から飲みなさい、これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたおよび多くの人のために流すわたしの新しい契約の血です。飲むたびにわたしの記念としてこのように行ないなさい』(第二聖別禱)新約聖書の中には、マタイ福音書 26:26-28、マルコ福音書 14:22-24、ルカ福音書 22:17-20、I コリント 11:23-25 に保存されています。

多くの宗教に共通しています。ヒンズー教徒はガンジス川で沐浴をします。日本の山岳宗教でも、滝や川での禊(みそ)ぎが大切な修行となっています。旧約聖書でも、水で人々やものを清めるという習慣は随所に出てきます。列王記下第5章には、アラムの将軍ナアマンがヨルダン川で体を清めることで重い皮膚病を神に癒してもらったという話がでできます。イエスさまの時代には、罪の清めのための洗礼を授けるという運動が起こっていました。洗礼者ヨハネも、ヨルダン川で悔い改めの洗礼を施し、人々に罪の悔い改めを迫っていました。イエスさまも、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられました。

しかし、キリスト教の洗礼は、単なる清めや禊(みそ)ぎではありません。洗礼には、①罪の赦しと清め、②イエス・キリストの死と復活にあずかる(新生)、③共同体への迎え入れ(キリストの肢に連なる)、④聖霊の賜物、⑤キリストの祭司職にあずかる、といういくつかの意味があります。

パウロは、ローマの信徒への手紙の中で「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」(6:4)と書いています。わたしたちは洗礼を受けるときに、古い自分を脱ぎ捨てます。それは、イエスさまが「罪に対して死」(ローマ 6:10)んで下さったように、わたしたちも罪ある自分を滅ぼし、「神に対して生」(ローマ 6:11)きるようになるためです。つまり、罪を赦され、神の子となって生まれ変わるのです。「新生(新たに生まれる)」といってもよいでしょう。それを可能にしてくださるのが聖霊です。聖霊はわたしたちの内に働いて、わたしたちに真理を悟らせ、イエス・キリストを救い主として告白させてくれます。「聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。」(コリント一 12:3)イエスさまが洗礼をお受けになったときにも、聖霊が鳩のような形で降ったと福音書すべてに書かれています。

洗礼の方法には、全身を水に浸す「浸礼」と、頭に水を注ぐ「滴礼」とがありますが、聖公会では多くの場合、聖別された洗礼盤(フォント)の水を注ぐ「滴礼」を方法として用いています。祈祷書の洗礼堅信式のルーブリック(細字規定)を見ると、「父と、子と、聖霊のみ名を唱えるごとに志願者を水に入れるか、またはその頭に水を注ぐ。」となっていますので、浸礼も可能であることが分かります。

洗礼は一生に一度しか受けることができません。他教派から転会する場合でも、前の教会で受けた洗礼は基本的に有効です。ただし、次に述べるように、「水」を用いることと、「父と子と聖霊のみ名」によることが必要です。聖書の中には「イエス・キリストの名」による洗礼に言及されており(使徒言行録 2:38,8:12 他)、古い定式として「イエス・キリストの名」が用いられていたことが分かります。ただし、その後三位一体の教えに基づく「父と子と聖霊の名」(マタイ 28:19)によって洗礼を授けることが必要であると認められました。ですから、「父と子と聖霊のみ名」によらない洗礼は無効とされます。

1959年の文語祈祷書では聖洗式と堅信式(信徒按手式)が別々に定められていましたが、1990年に出された現行祈祷書では「洗礼堅信式」という式文になっています。これは、古代教会の慣行を回復したものです。中世初期以降、入信の式は洗礼と堅信という二つの式として行われてきましたが、古代教会ではそれらはもともと一つのものとして行われていたからです。現行祈祷書では、成人の場合、洗礼と堅信を連続した一体のものとして執り行います。従って、その主旨からいえば、司式者は主教が務めるのが当然ということになりますが、通常、洗礼は司祭が執行します。緊急洗礼の場合は、水と「父と子と聖霊のみ名」という条件を満たしておれば、だれでも洗礼を授けることができます。

「緊急洗礼」のルーブリック(祈祷書 287 頁)には「司祭に支障のあるときには、他の聖職あるいはだれでもこれを行なうことができる。」と記されています。ただし、「司式者は授洗年月日、場所、司

式者名、教名、姓名、生年月日などを教会に報告しなければならない。」とされており、さらに「受洗者が回復したとき、司祭は本人、教父母、会衆とともに聖堂において通常の洗礼堅信式のうち、水の聖別と授洗以外の部分を行なう。」とも定められています。

### 3. サクラメントとは何か

「聖奠」とは英語の「サクラメント sacrament」の日本語訳（あるいは漢訳）です。ローマ・カトリック教会では「秘跡」、東方正教会に連なるハリストス正教会では「機密」、多くのプロテスタント教会では「聖礼典」という言葉が用いられていますが、意味はみな同じです。

もともと、「サクラメント (sacrament)」という英語は、ラテン語の「サクラメントゥム (sacramentum)」から来ています。サクラメントゥムとは、ローマ帝国における法廷用語で、原告・被告が提供する供託金のことでした。それが軍隊用語になったとき、「軍人の聖なる忠誠の誓い」を意味するようになり、聖書がラテン語に翻訳されるときにこの語がギリシア語の「ミステリオン(神秘・奥義)」の訳語として用いられるようになったのです。

では「サクラメント」とは何でしょうか。今から 1500 年ほど前に活躍したヒッポの主教アウグスティヌスによるとされる定義は、それを簡潔に言い表しています。「目に見えない恵みの、目に見えるしるし」。「教会問答」の「目に見えない霊の恵みの、目に見えるしるしまた保証」というのは、このアウグスティヌスの定義に基づいています。アウグスティヌスは別の箇所でも、「神秘的な事柄のしるし」とも言っています。アウグスティヌスによると、サクラメントには目に見えない神秘的な面と、目に見える物的な面の二つの要素があるということです。物的なものによって霊的なものを、地上的なものによって天上的なものを示すのがサクラメントです。そういう意味では、サクラメントはこの世界の至るところで成立しうるもので、この世界全体が広い意味では「サクラメンタル (サクラメント的・聖奠的)」であると言っても良いでしょう。

しかし、「聖公会綱憲」を見ると、「イエス・キリストの命じ給うた教理を説き、その自ら立て給うた洗礼および聖餐の二聖奠を行い…」とありますので、聖公会では洗礼と聖餐の二つを聖奠としていえることが分かります。それは「主イエスが自ら立てた」ものだからです。宗教改革までの教会(カトリック教会)では、伝統的に7つのサクラメントが行われてきました。洗礼、聖餐、堅信、聖職按手、聖婚、個人懺悔、病人の按手・塗油がそうです。しかし宗教改革の結果、聖公会を含むプロテスタント諸教会では、洗礼と聖餐のみをサクラメントと考えるようになりました。ルター派は当初、告解(懺悔)もサクラメントの準ずるものとしていましたが、やがてそれは洗礼に吸収されました。しかし聖公会では、その他の5つの諸式も大切な「聖奠的諸式」<sup>3</sup>として保持しています。

サクラメントが成立するためには、この世界に存在して私たちに感知できる「物素 Ele-memt」と、「言葉」が必要です。アウグスティヌスは「物素に言葉を加えなさい。そうすればそれはサクラメントになる」と言っています。「言葉」とは根本的には「神の言」であるイエス・キリストです。聖餐式の場合は、パンとぶどう酒が「物素」で、「制定語」を中心とした祈りが「言葉」です。洗礼の場合は、水が「物素」で、「父と子と聖霊の名によってあなたに洗礼を授けます」という祈りが「言葉」です。これらが合わさって、「聖奠」つまり「サクラメント」が成立するわけです。

<sup>3</sup> 聖奠的諸式の範囲、また、それをどの程度聖奠と同等に位置付けるかは、教区・教会のチャーチマンシップや伝統によって多様化しています。